



船上のテントの中では、漁前の賑やかなひとこまが繰り広げられる。
そこにはたくましさと屈託のなさ、そして海に対する感謝と敬虔な祈りがある。

よ」と手を休めることなく咳く。もちろん夜、部屋明けを消す時も同じ、「朝のお礼を言わな、一日が終わらんとたい」。祈りと感謝、それが海で暮らす者の日常には深く根を下ろしている。

道なき道を自在に泳ぐ 経験から編まれる海の地図

12時前。若干のうねりがあるので、潮が引くまで港に船を付けてしばし待つ。岸に上がる八重子さんに着いていくと、表面に産毛がたくさんついた葉っぱを採っている。かつて茎から繊維をとっていたという「ラミー」と呼ばれる葉は、水中眼鏡の天然くもりどめ。レンズをこする作業を「磨き」という。ほかにヨモギや海藻などが使われるが手近なものを賢く利用する、これも海女の知恵。

ところで、ベテランの海女は「上海女」と呼ばれる。条件は3つ。海の道筋や瀬(岩場)を把握していること、獲物がたくさんいる瀬に早く辿り着けること、最後は負けん気と根性などのメンタル面が物を言う。例えば、アワビはすべすとした「大びわ

と呼ばれる瀬を好むが、その瀬が海のどの辺りにあるかまで正確に記憶しているのが上海女なのだ。その海の地図は、自らの経験をもとに毎年更新されていく。

もちろん、基本的な獲物の習性を理解することも重要だ。

雲丹は、砂に半分埋まった寝石にいる確率が高い。力のある人は石を裏返して捕るが、ない人は周囲を捕る。すると中心にいる分が外に出てくる。サザエは水温が上がると、岩に生えるカジメという海藻の中にちよこんと座っていることが多い。だから、カジメの上を確認するのは必須事項。それから、ばふん雲丹は石の下に住みついて流れてきた海藻を食べるので、海藻が多い場所で捕れたものは身がたっぷり入っている。岩の横の溝に挟まっている赤雲丹は、傷つけずに捕らないと、赤雲丹が好物の鯛に気づかれる恐れがある。魚も競争相手なのだ。

現在は、フジツボなどが増え、アワビが好むきれいな岩を探すのも困難だし、ホンダワラと呼ばれる流れ藻も年々減っている。近年では昆布の養殖やアワ



ビの放流なども行なわれているが、かつての海を取り戻すまでには、さらに長い年月を要するだろう。

大海原に身を投じ ひたすらに獲物を狙う

「こうへえ、こうへえ」というかけ声とともに、今日のポイントに碗を下ろす。日本語かと思いきや、「ゴーヘッド(前進せよ)」という意味の船乗用語であった。ちなみに一回の潜りを「ひと潮」といい、2回目を「ふた潮」という。今日のは出発も遅くなったし天候も悪いので、ひと潮。身支度の最終チェックをして、水中眼鏡に黙々と「磨き」をかける面々。さっきまで世間話に興じていた船内に、緊張感が漂い始める。

「どお、泳ぐよ!」。号令をかけるように言い放ち、先頭